

葬儀の日

松浦理英子／三つの短篇小説

1980

文藝春秋版

葬儀の日

一九八〇年八月十五日 第一刷

著者 松浦理英子まつらりえこ

発行者 杉村友一

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三二二三
電話代表(三)二六五二二二一

定価 一五〇〇円

印刷所 理想社印刷

付物印刷 凸版印刷

製本所 矢嶋製本

製函所 加藤製函

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

著者略歴

一九五八年八月、愛媛県松山市に生まれる。七七年青山学院大学文学部仏文科に入學、現在四年生に在学中。七八年「葬儀の日」で第四七回文學界新人賞を受賞、同作品で芥川賞候補となる。作品として他に「火のリズム」「乾く夏」(芥川賞候補作)「肥満体恐怖症」がある。

葬儀の日
目次

葬儀の日 5

乾く夏 69

肥満体恐怖症 151

あとがき

葬儀の日

昨日の葬式はとてもうまく行った。行き過ぎたくらいだった。私は極めて真に迫った泣きっぷりを見せ、それを見た参列者たちは充分悲しい気分を作り出すことができたのである。もともと私は、仲間内でも、「泣き」の名手ということになっている。私の泣く姿を目にすれば、大方の人が涙を誘われたものだ。私が単に商売で泣いている「泣き屋」に過ぎないとわかっていても。その私がこの道に入って以来の最上の出来映えだと認めるほどの首尾だった。呼気にまで高慢を含んでいるような、見るからに冷淡そうな人でさえ、絶頂時に於ては眉根を寄せ口を歪めた。喪主に至っては、私の涙の本物らしさに感激し、「こんなにもうまい泣き屋がいるなんて。」と言って、頬を震わせて手を差し出した。私の方は、思わず後ろに退り、目を逸らしたいのを懸命にこらえ、ひと呼吸してようやく、咳混じりのひどいがらがら声で答えた、仕事ですから、と。この実利的でせっかくの雰囲気をおち壊す言葉を聞いても、喪主は別に興醒めた顔もせず、皺くちゃのネクタイで顔を拭きながら歩いて行った。そんなふうには私は泣いて見せたのである。

今日の私はいくらか疲れている。でも仕事があれば行かねばならない。いつでもどこでも、どんな状態であろうとも、私たち泣き屋は泣く。自分の感情とはかかわりなく。何故ならお金を貰うのだから。それが不自然なことだとか、死者への侮辱であるとかいうことは、雇う側の喪主が考えるべきことで、私たちはただ葬式の悲しみを盛り上げるといふ勤めを果たせば良い。今日の私はいくらか疲れている。そして行かねばならない。私でなければ駄目な仕事があるのだ。今、崩れ残った廃屋の壁に凭れて茫然としている。見る物は何もなく、考えることは何もなかった。

老婆がアコーディオンを弾きながら唱っている。同じ泣き屋仲間の見馴れた老婆だ。多分生まれた時から見て来た。老婆は死んではいけない。死にそうにもない。唱っている唄は古い唄で次のような内容だ。一人の少女があった。小さい頃から理由もなく母親に虐待される。泣きながら何故と尋ねるのだが母親は答えない。ただ言う、泣く泣く暮らしている人たちもいれば、暮らすために泣いている人たちもいる、おまえが泣いて何が悪かろう、と。リズムの狂った白痴的に明るい感じの曲調が、アコーディオンの腑抜けた音色の悲しさと妙に調和している。

老婆に何か話しかけた。何と話しかけたのかは忘れた。どうせ大したことは言わなかつ

たのだ。話がしたかったわけでもない。老婆が返事をしなかったことは別に気にならない。老婆は楽器を弾くのをやめてじっと立っていた。私の目の先にあるその背中はやたらと老いぼれていた。

昨日の葬式に「笑い屋」は来なかった。葬式という行事が本質的に持つ欺瞞が我慢できない喪主が、皮肉な演出として時おり呼ぶのが笑い屋である。悲しみの情に動かされない人でも、葬式の席で笑うような不謹慎な者に対しては、怒りを掻き立てられ感情を露わにせずにはいられない。泣かせるにせよ怒らせるにせよ、要は人々を煽ることが目的なのである。その職業の人々は、私たち泣き屋が泣いてお金を貰うのと同様、笑ってお金を貰う。泣き屋と笑い屋を同時に呼んで異様に作偽的な情景を作り、薄笑いを浮かべてそれを眺めるこの上なく皮肉な演出家もいる。

仕事のたびに一緒になる笑い屋を知っていた。十五歳の時に初めて同じ葬式で顔を合わせた。以来同じその人間と、仕事のたびに必ずはち合わせるのだ。雇い主は皆違うし、この上なく皮肉な演出家がそういるとも思えないのに、常に、私がいれば彼女もいた。同じ一つの会場で、彼女は高く低く、自然に、しかも適度にわざとらしく、笑い声を上げてふらふらする。私は私で肩から爪先まで涙漬けになり柱にすがる。眼も合わせず足跡も嗅が

なくとも、彼女の存在は空気の濃密さでわかるのだ。多勢の参列者たちの間を縫って続く彩りのある流れをたどれば、その果てに彼女を知覚した。昨日を除けばいつも。式場の近くまで来た時、彼女は来ていないことがわかった。体にまといつく物が感じられなかったから。昨日は彼女に会えなかったのだ。待っていたのに。

老婆がアコーディオンをしっかりと抱えてゆっくりと体ごと振り返った。押し殺した鈍い眼光を発しながら私を見つめ口を開かない。私を見つめているのだが、私の何を見つめているのだろうか？ 見つめるべき何物が私にあると言うのだろうか？ 見つめるべき何物を私の上に見つけようとしているのだろうか？ 視線に怯えたりはしない。けれども探りを入れようとするあの眼はいったい何だろうか？ 昨日まで、仲間の誰一人としてこんなふうには私を見なかった。仲間とは、共に寝、共に喰らい、言葉もなく息も確かめず、区別もつけずにそばにいられる者たちのことである。ところが今日、老婆は私に侵食の視線を向けている。すでに別の者、仲間からはみ出した異なる者として。

「あんたも運が悪い。」突然老婆が言った。「こんなに早く来ちまうなんてねえ。まだ二十年も生きていないんだろう？ 事故だから諦めるしかないよ。もう悟ってしまったのかい？ 抜け殻みたいな顔をしてさ。無理もないけどね。でもあんたは不思議だよ、昨夜か

ら取り乱しませずと悠然としている。どんな感じだい、今は？ わたしには経験がないんでね。髪の毛の一本一本が別物に変わって行く感じかい？ 腕が一本ぼろりともげ落ちたって驚かないという感じかい？ いやはや、興味深いねえ。」

そこで調子を変える。明らかに楽しんでた。舌舐めずりをして、私の状況と安全圏にいる自分の立場を見比べ、吟味するように。

「まさか知らないわけじゃないだろう、あんたが今日どうなるか？ 今日の葬儀に出てどうなるか？ いいかい、あ、それは昨日来なかったんだよ。あんたがそう言ったんだ。待ったのになかったって。逃げられはしない。きっと素晴らしい葬儀になるよ。行かなきゃならない。教えてやるほどのことでもないだろう？」

下降して行く自分自身の姿が私には見えた。

彼女と会うことはもう二度とない。四年間会い続けたのだけれど。その間、彼女が私に与えた物など何もない。彼女にしても私から何も受け取らなかった。そういう間柄ではなかった。私たちは友達などではなかった。もちろん仲間でも。名づけるなどという小細工のしようのない圧倒的な関係だった。二人が同じ葬式場に入ると、その場が緊密に、濃厚

になり、一種の飽和空間を持つ。私たちにしかわからないことだったが。言ってみれば、不倫の匂いのする非公式の血族のような関係であった。

何故ここに来たのかと、初めて出食わした葬儀の終わった後、彼女が尋ねた。私はわざと曲がりくねったどうにでも取れる答え方をした。少なくとも私が分裂しているからではない、と。ちゃんと意味は通じたようだ。分裂などしていない、あなたはひとつの極致だ、そう彼女は言った。

今、ひどく気がふさいでいてしかも興奮している、と彼女は自分の状態を説明した。私は後を受けた。ひどく気がふさいでいるし、ふさいだ内部はとても空虚なのだ、だが充たすことができるだろう。

私たちはうんざりするくらい歩調が合った。また、歩くのと同じ調子で喋ったので、実に似たような喋り方をした。どちらが話しているのかわからないくらい。

あなたはまさに泣き屋だ、と彼女が言った。どうしてそういうことが言えるのか、あなたは泣き屋を知っているのか、と私が尋ねた。

歩き続ける。

私は笑い屋としての私を知っている。私は笑いを職業としているが、それだけの理由で

笑っているのではない。骨盤がいつも笑っているのだ。腹や顔ではなく骨盤が。坂道を転がっている時も、太陽光線と瞳み合っている時も、無色無臭の人ごみの密林地帯で迷っている時も。およそ生まれ落ちて以来、外観に表わす表わさないは別として、笑い続けて来た。何がおかしくて笑う、と言うのではなく、暗黒の胎内を脱してこの世界に身を置いた最初の時に、眩しきの攻撃に対処できなくてたまたま取りすがった綱が「笑う」という行為であったのだ。この綱を掴んでさえいればひっくり返らないと知ってしまった以上、どうして放すことができよう？

私の仲間も笑う、同じ理由で。私はまだ十五年くらいしか笑っていないけれど、何十年も笑っている人もいる。私たち笑い屋は日々公園の通路に溜って互いに笑いをまさぐり合う。一人でも笑う、ニコチンとタールで捏ね上げた煙幕を張って外界を遮断して。完璧に一人になって回帰する波に漂って。そういう完全な行為のさなか、むらのある煙幕の破れそうに薄い箇所から透けてあなたが見えた。やはり何やら綱に掴まっているあなたは別の平面に投射された私のように思えた。私が笑い屋に生まれついたらと同様あなたが泣き屋に生まれついているのはすぐわかった。

泣き屋である私に対して笑い屋であるあなたがどこかに存在するであろうことは、仲間

たちから聞かされたこともあったし、私自身予感していたことだった。意外に早く私たちは会ってしまったようだ。とても会いたかったけれど、こうして会ってしまったことは取り返しのつかないことのような気がする。嬉しいには違いないが、あなたの体内に蓄積したニコチンの量だけ私がいる。私もニコチンを食べながらあなたを捕えて来た。私たちは互いに互いを宿し合っている。では、私の中のあなたの分だけ私は私でないのだろうか？ いや私はやはり私なのだ。私の中のあなたも私だ。あなたを体内にどれだけ取り込んでもそれは変わらない。その理由を考えると——恥に満ちている。別々の綱に掴まっているはずの二人が、今ここで一緒に歩いていて、それぞれの綱の根元を探り当てつつあるのは、どうしようもなく絶望的なことだ。ただし絶望とは快樂だから、私たちは出会いの苦々しさをちゃんと楽しんでいる。

私たちは立ち止まって煙草に点火した。その時の煙は海底の藻のようにたなびき、くねり、広がらないで絡みついて来た。私たちは向かい合って立っていた。やがてニコチンの触手が猥褻に双眼を覆って何も見えなくなるまで。

私はどうやらうっすらと笑ったらしい。意地の悪い声音で好き放題のことを喋っていた